

親見  
繇鳥  
聖王  
人

しん

らん

しょう

にん



親鸞さまがお生まれになったころ、  
京都ではお侍たちの争いがたえず、  
おおくのひとたちが殺されていきました。  
また、大雨で川の水があふれたり、  
日照りがつづいたりしました。  
そのために食べるものがなくなり、  
おおくのひとたちが飢えたり、  
病気になって死んでいきました。  
いのちは、はかなく、  
悲しいものとなりました。



わたしたちは、このはかないいのちを、  
どのように生きていたらよいのでしょうか。

ほとけさまは、わたしたちは自分ひとりで生きているのではなく、  
たくさんの方のひとによってささえられて生きていることを  
教えてくださいました。

そして、みんなのいのちを大切にすることこそが、  
自分のいのちを大切にすることであると、  
教えてくださいました。

その教えに生きて、  
わたしたちもほとけとなつてほしい  
というのがほとけさまの願いなのです。



親鸞さまは九才さいになられたとき、  
ほとけさまの教えおしを勉強べんきょうして、  
ほとけさまになりたいと  
比叡山ひえいざんのお寺てらでお坊さんぼふになりました。  
そのころ比叡山ひえいざんのお寺てらでは、  
たくさんのお坊さんぼふたちが、  
修行しゆぎょうをしていました。  
親鸞さまも二十年ねんのあいだ、  
いっしょうけんめい  
修行しゆぎょうにはげまれました。

